

チャールズ・テイラーと リベリア国民愛国戦線の 内実

トム・ウォエウィユ

真島一郎 訳・解説

《解説》

以下に訳出する二つのテキストは、トム・ウォエウィユ (Joconte Thomas Woewiyu) 氏がリベリア内戦の渦中で国際プレスに向けて発表した声明の一部である。第一のものは、1994年7月19日に開かれた合同記者会見における発言の抜粋であり、第二の短い一節は、翌95年1月に *West Africa* 誌記者とのインタビューで表明された回答の一部である。これらはいずれも単独記事のあつかいで、同誌上に全文が掲載されている(1994年8月1～7日 1342～1344ページ；1995年1月16～22日 62～63ページ)。

1989年末、チャールズ・テイラー率いる武装勢力リベリア国民愛国戦線(NPFL)が国内北東部のニンバ州に侵攻して幕をあげたリベリア内戦は、昨年7月19日の国民選挙の結果、当のテイラーが第22代共和国大統領に就任するにおよび、不安定な政局ながら一応の終結をみることとなった。これにともない、内戦の前半期を通じて長らく不明なまま残されていた二つの重大な事実関係が、内戦当事者たちの発言や動向、および国内外のジャーナリスト・研究者の

調査により、しだいに明らかとなりつつある。

今後のリベリア情勢をうらなう上でも確実に鍵をにぎってくるであろう二つの問題点とは、第一に、NPFLがリベリア現代政治史の脈絡からみていかなる政治的立場を内に秘めた組織であり、とりわけその指導者だったテイラー新大統領がいかなる支持基盤とアジェンダをたずさえてきたかという点である。また第二に、リベリアの政治・経済を建国以来100年以上にわたり支配してきたアメリコ＝ライベリアンの旧権力層が、サミュエル・ドーによる1980年の軍事クーデタ以後、90年代の内戦過程を通じて水面下でいかなる活動を続けてきたかという問題もあった。当初はたがいに切り離されていたこの二つの問題が、実はほぼ同一の事実関係に収斂することが判明する端緒となったのが、ウォエウィユ氏による以下の一連の声明であったと筆者は判断している。

ウォエウィユ氏は1983年、アメリカ留学中に「南北アメリカ在住リベリア人協会同盟」の議長として政治キャリアをスタートさせたが、ニンバ州で同胞のギオ(＝ダン)族住民が国軍に虐殺された85年のク

イウォンパ事件以後は、亡命先のコートディヴォワールでドー政権の打倒をめざすNPFLの結成メンバーとなった。内戦前半期の彼はNPFLのスポークスマンとして一連のECOWAS和平交渉に出席するなど、テイラー軍の知的中枢として活躍し、平和主義的な姿勢でも知られていた。その彼がテイラーと政策面で対立し、今やNPFLにも内部分裂の兆しがあると報道されだしたのは、93年前半のことである。翌年、NPFL代表の一人としてリベリア国民暫定政府(LNTG)の公共事業相に就いた彼は、パルンガのNPFL本部からECOWAS停戦監視軍(ECOMOG) 管轄下のモノロヴィアへ居を移した直後、同期入閣組のNPFL代表3名と結束して、以下に紹介するテイラー非難の声明を公然と発表したのである。その後彼は、NPFL分離派にあたるNPFL中央革命評議会(NPFL-CRC)を結成し、たび重なるテイラーの入閣妨害にあいながらも、内戦終結後の挙国一致内閣ではテイラー批判者として労相のポストを勝ち得ている。

ウォエウィユが反テイラーの声明を発表した1994年といえば、リベリア国内はNPFLにくわえ、マンディンゴ族系のリベリア民主統一解放運動・クロマー派(ULIMO-K)、クラン族系の同・ジョンソン派(ULIMO-J)、同じくクラン族系の旧リベリア国軍(AFL)、リベリア平和評議会(LPC)、ロマ族系のロファ防衛軍(LDF)などの武装勢力が割拠するなか、12回めの和平協定もむなしく頓挫するという絶望的な状況が続いていた。したがって、ここでいずれかの勢力に属する内戦当事者が何らかの状況認識を語ったからといえ、それが真相に迫る中立的なコメントであるなどと無批判に言うつもりは、むしろ筆者にない。だが当時のウォエウィユによる声明は、第一にその後いよいよ明らかとなったテイラーとアメリカンライベリアン旧支配層との国内利権をめぐるつながりを最初に指摘した点で、特筆すべき内容をもつ。一説にはアメリカンライベリアンの父をもつというテイラーの真のアジェンダが、アメリカン

イベリアンによる旧来の少数支配をリベリアに復活させ、その障害となりうる“地方民”のインテリヤ有力者を排除することにあったと指摘する論文も近年では発表されている。

第二に、ギオ族出身のウォエウィユは、NPFLの“真の創設者”(組織理念上の先駆者)を同胞の殉死者クィウォンパとみなす一方、テイラーについてはアメリカンライベリアンと結託してNPFLの“高潔な目標”をあらぬ方向にねじまげ、自らの権力追求のためにニンバ州の“地方民”を兵力として利用しているだけだと厳しく糾弾する。西側のジャーナリストたちがある時期まで、NPFL代表としてテイラーが暫定政府に送りこんでくる人物の多くがアメリカンライベリアンであることを曲解し、彼らはおそらく一種の当て馬にすぎず、テイラーが真に権力を得たあかつきには、NPFL軍の主力であるギオ族出身者が政府の中枢に多数登用されるだろうと勘ぐっていたことが、まことに皮肉なニュアンスをもって筆者には想起されてくる。ウォエウィユ氏による当時の声明のうち、以下ではリベリア国内の錯綜する民族対立についての指摘を中心に訳出し、ドーによる1980年の軍事クーデタ(アメリカンライベリアン支配体制の崩壊)からの連続線上で今後のリベリア情勢を分析していくうえでの参考に供したい。

1 1994年：テイラー批判の開始

「記者の諸君…わたしはNPFL創設メンバーの一人である。組織の名称がないころからわたしはここにいて、他の人々とともにNPFLを結成した…だから、わたしがもはやNPFLとは行動を共にしないと考えるのは…誤りであり、それはリベリア国民を失望させようとして、NPFLとその高潔な目標を実際に悪用してきた者たちがしくんだ分断策にすぎない。

たしかに、NPFLにもこの国にも問題はあつた。だがNPFLそれ自体は、まったく善良な組織である。男性も女性も参画する、大義に捧げられた組織である。NPFLが今回の革命に着手した際、ほぼすべての国民がこれを支持したことを、諸君の大方はまだ覚えておられよう。サミュエル・ドーの独裁を一掃すべく、国民の力が行使されねばならないという理念を支持しない者は、当時ほとんどいなかったのだ。この高潔な目標をくじき脱線させたのは、戦闘にあたっていた者たちでもなければ、戦闘のやり方でもなかった。これら一切の問題を生んだのは、ほかでもないNPFLの指導層だったのである。

むろん諸君も知つてのとおり、NPFLは現在テイラーの指導下にある。だが実のところ、彼がNPFLの指導者におさまつたのは一連の偶発事の結果であり、彼が組織の創設者なのではない。NPFLは故トマス・クィウォンパによって創設され、その企てが失敗した後も、事態が変革されるまでは闘争を継続しなければと感じたわれわれのような者が組織を維持してきたのである。だから、NPFLがテイラー以外の卓越したリベリア人に導かれる可能性もあつただろう。かくいうわたし、トム・ウォエウィユに導かれる可能性もあつたろうし、モーゼス・ドゥオブやハリィ・ユアンに導かれる可能性もあつただろう。こうした人物は、NPFLの組織が復興した際のメンバーだった。そしてそこにはテイラーもいて、一連の偶発事の結果、われわれは彼が組織を導いていくことに合意したのだ。だが彼は何年にもわたりこの合意を悪用した。高潔な人々からなるグループの信頼を悪用した…われわれは何年もこつこつと務めをはたし、政治活動を通じて目標に到達しようと、全員があらゆる機会をNPFLに捧げてきたように思う。なのにテイラーはこれを執拗に妨害し、選挙によってで

はなく力によって自分がこの国の大統領に就くべきで、さもなくば戦争はけつして終わらないなどと主張した。

…NPFLを導いてきたわれわれは、テイラーと一握りの者たちがNPFLの高潔な目標を復讐の冒険へと変えてしまったことに何年も前から気づいていた。それは“アメリコ＝ライベリアン vs 地方民 (country people)”という復讐の図式である。われわれは、すべての人々と行動をはじめた。アメリコ＝ライベリアン、バンディ族、ギン族など、この国のあらゆる部族、あらゆる人々が問題を解決しようと手を取りあつた。ドーの出身したクラン族のメンバーもふくめ、あらゆる人々が国民の向上にむけて状況を変革すべく、NPFLに加わろうとやってきたのだ。だがテイラーと一握りの者たちは、アメリコ＝ライベリアン族 (Americo-Liberian tribe) の国家指導者13名が殺害されるにいたつた1980年のクーデタに復讐するには、これが絶好の機会であると心に決めた。13名の処刑決定には自分も加担していたというのに、テイラーは権力追求の過程で寝返り、いわゆるアメリコ＝ライベリアンたちにとり自分こそが救世主であることを信じこませようとした。こうしたテイラーの行動は、いずれも彼とその取り巻きが、いわゆる“地方民”を“地方民”同士で敵対させるために利用しようと決めたことに発している。NPFL軍で闘い死んでいった子どもたちは、テイラーの身内でもなければ、彼と同じ出身基盤〔＝民族〕の子どもでもなかった。自分の実子は内戦のさなかですらジュネーブやどこか他国の私立学校に通っているというのに、テイラーは他民族の8歳の児童がAK-47を引きずって背後から自分を護衛するのを自慢するありさまだ。そしてその子たちが自分にとってはどうでもよい民族集団の出身であることを、彼は知つてもいる。これこそが今次の戦争の本質で

あり、高潔な目標を掲げてきた NPFL がテイラーの下で目標をほぼ見失っていくプロセスの本質だったのである。

他の武装勢力が出現したのも、まさにテイラーのこうしたやり方に抵抗せざるをえなかったからだ…ULIMOの状況を例にとって考えていただく…テイラーの兄、ネルソン・テイラーのせいで、ULIMOの組織はひどく強固になってしまった。ネルソンが虐殺に虐殺を重ねたせいで、ついに ULIMO が地域住民の助けを得て、〔自衛手段として〕抵抗を始めねばならなくなったからだ。ネルソンはボン鉱山に行って虐殺をくりかえし、ULIMOはかかる状況下でも住民の支持を得ていった。ネルソンが次に移動したバッサ州でも同じことが起きたし、シノエ州でも彼が住民を苦しめ虐殺したあげく、LPCが〔自衛組織として〕登場した…シノエ州とバッサ州で戦闘をはじめたLPC兵士の大半は、いわゆる“原住民”(native people)への復讐として、〔一部のNPFL将校に〕耳をそぎ落とされ〔脱走し〕たNPFLの兵士たちなのだ…

だから、NPFLは自らに問題があることを認めるべきだったのだが、わたしは今日、NPFLという組織それ自体が問題ではないことを国民に知っていただきたい。NPFLに属するわれわれが問題なのではない。われわれが自らみとめる問題とは、われらが指導者テイラーなのだ。彼はこの国のいかなる平和にも敵対している…われわれは暴力の回避を望んでいるというのに、暴力の回避はテイラーの望まぬところだ。彼は、われわれとその高潔な目標を、ULIMO内部に生じたような状況へと矮小化しようとしている。ULIMOでは、国民の運動、すなわち正義に向かう運動、民主主義に向かう運動がただの部族紛争へと矮小化されてしまった。この国の二つの部族、マンディングゴ族とクラン族の大半は今回の戦争に関与していないとい

うのに、彼らの名が今や戦闘の具に用いられている。NPFLまでもそんな状態におとしめてしまうつもりは、われわれにない。われわれのリーダーシップこそが問題である事実をNPFL内部で公然と認めることにより、この問題が解決できるものとわれわれは信じている。そこでわれわれは NPFL の兵士に向け、ULIMO, AFL, LPC, LDF など、いかなる武装勢力との闘いも中止するよう要請していきたい。他の武装勢力が NPFL の敵ではない。テイラーこそが NPFL の敵なのであり、兵士諸君はこの事実を知っておかねばならない。

われわれは他のすべての武装勢力に呼びかけ、われわれがこの問題を今こうして告白し、これ以上の人命と財産が奪われることなく問題を是正しようと望んでいることを知っていただきたい。そこでわれわれは LPC, LDF, ULIMO, LNTG および国際社会に向け、全勢力が暴力を停止し、NPFLが内部でこのリーダーシップ問題の解決を図っているあいだは活動を休止するよう取りはからっていただきたと思う。テイラーはリベリア社会にとっての敵である。彼は NPFL にとっても敵である。彼こそがわれわれの理想をゆがめ、リベリア国民の高潔な目標にいたずらな流血をもたらしたのだ。

NPFL陣営に姿をみせた数名の人物がその後行方知れずとなってしまったのも、けっして事故などではない。たとえばジャクソン・ドー〔=1980年代にサミュエル・ドーのライヴァルだったギオ族出身(父方)の政治家〕は、戦闘のさなかで捕まったのでなく、もともと彼の方がわれわれの陣営まで出向いてきたのだ。彼はわれわれの兵士数名に先導され、カカタ基地まで喜んでやってきた。それで戦争のさなか、国民の一指導者が救出されたことを祝う、たいへんに盛大な祭りがカカタで催された。サミュエル・ドーがその死を望んでいた指

導者が救出されたからだ。それから彼はハーベルのテイラーのところまで護衛つきで移動し、出迎えをうけた。わたしがシエラレオネにいた時のことだ。テイラーは、ジャクソン・ドーが自分のところに今いることをわたしに伝え、わたしが…〔国内の〕すべての政治家にジャクソン・ドーの無事を知らせよう要請してきた。だが、わたしが一週間後にハーベルに到着してみると、テイラーはジャクソン・ドーの居場所をわたしに話せなくなっていた…クーパー・テアーの一件もある。わたしは私人としてフリータウンに赴き、リベリア国民に新たな暴動や戦争をもたらさぬよう、テアーに働きかけた。彼はニンバ州の市民であり、ニンバ州はすでに甚大な被害をこうむっていたから、彼が…新たな戦闘をはじめて危険を倍加するなど理不尽であるとわれわれは感じていた。テアーはこれに賛同してやってきた…だが、わたしがアメリカに行って帰ってくると、テアーには会えなくなっていた。テイラーは、テアーに何が起きたかをわたしに話せなくなっていたというわけだ。1年ほど前、わたしはバルンガの留置場にいた43名のうち18名を解放した。テイラーは、こうしたクーパー・テアーのような人々を出迎えたあと、ほぼ2年にわたり留置場に送致していたのである。わたしは、まだ留置場に残っている人々に起きたあらゆる出来事について責任を感じたし、このうち数名を救出するためにはどんなことでもしなければと思い、実際に彼らを救出した…こうした人々全員の民族的背景をみれば、彼らがみな“地方民”や“土着民”などと呼ばれてきた共通の背景に由来する人々であることが諸君にもお分かりいただろう。これがわたしの思いちがいだとはいえないだろう。なぜなら、それはテイラーの側で計画して決めたことだからである。“地方民”への復讐が、テイラーと一握りの者たちによる行動の背景

にあることを国民は知っていたが、なかでも彼らのこうした計画はごく最近になり、きわめて顕著になりつつある。

…テイラーは、あらゆる種類の口実を利用しようとする。彼は当初、アメリコ＝ライベリアンの国家指導者13名を処刑する決定に加わっていた〔1980年クーデタの〕時点では、自分が一人の“地方民”として闘っていることを確かにアピールしようとしていた…

ただ、過去の彼がそうだったからといえ、〔今回の内戦で〕アメリコ＝ライベリアンがテイラーとの共謀に加担してきた事実に、わたしはいささかの疑念も投げかけるものではない。何らかの民族的・部族的境界線に沿ってこの国の分断をもくろむ者のためには、いかなる理由であれ戦闘をしてはならないことを、わたしは国民に示したいだけなのだ。個人的な動機がいずこにあるにせよ、テイラーはNPFLの闘争をこの国の変革に向けた政治闘争としてでなく、むしろ自分が権力をにぎるための闘争とみなしていることを、NPFLの兵士諸君には気づいていただきたい。仮にテイラーが権力の座についていれば、アメリコ＝ライベリアンと“土着民”をふくむ多数の国民、および彼が自らの権力願望にとって障害とみなす者は、みな確実に抹殺されていたことだろう。だからこそわたしは今日、すべての武装勢力のすべての兵士に向け、また各武装勢力のすべての指導者、LPCやULIMOなど、組織によってはそれぞれ自らの問題と自らのチャールズ・テイラーをかかえてしまっている人々に向け、この嘆願を発している…われわれはみな一つであることを、われわれ全員が認識しなければならない。この国家はわれわれ全員、この土地に生まれたりベリア人全員のものであり、第四・第五世代のリベリア人は、出身部族によって識別されるべきではないのだ。なるほど、われわ

れは互いを異なる民族集団として尊重し、民族の多様性がもたらす機会と調和を生かしていくよう努めねばなるまい。しかし、われわれは部族によってでなく、リベリアという出身国によって国際的に認知されていくべきなのだ。そこでわたしはNPFLの全兵士に対し、LPCやULIMOとの戦闘を停止するよう、またULIMOにはNPFLとの、くわえてULIMO同士の戦闘を停止するよう呼びかけよう。闘いにおける諸君の味方こそが問題であり、諸君の闘う敵が問題ではないからだ…NPFLは、LPCとも、ULIMOやAFLとも同じである。われわれはみな一つであり、われわれ全員のためにより良いリベリアをもたらしようとしている同じ国民なのだ。われわれが武器を用いねばならなかったことは、たしかに不運であった。だが、戦闘に巻き込まれてしまったわれわれにも、今や武器を置いて政治活動を優先させる用意ができています…

わたしは、その日が来るのを心待ちにしている。今回の紛争が終結し、ナイジェリア国旗を先頭にECOWAS全加盟国の国旗がひるがえるなか、主権を保証されたリベリア国民の勝利が祝福され、このモンロヴィア市と国内各地でパレードが催される日が来ることを。テイラーがこの日を迎えたくないというのなら、われわれの邪魔にならぬように道をあけていただかねばなるまい。われわれにはこうした目的がある以上、もう殺し合いを続けてはならないのだ…政治活動を通じ、民主主義的手段を通じて、内戦の現況をできるだけすみやかに終結へと向かわせるよう最善をつくすことを、わたしとNPFLのメンバーはここに誓うものである」

2 1995年：NPFL離脱後の見解

「内戦がはじまったころ、われわれはテイラーたちが過去の何か別の問題に復讐しようとしている兆しをみてとるようになった…

…テイラーが利用している若干の複雑な状況、それは民族の多様性、民族の局面である…われわれは戦争終結への道を見いだす必要から、テイラーと行動を共にする数名の人物とこれまで連絡をとってきたのだが、ここにきわめて明白な一つの事実がある。それは、テイラーと彼を代表にかかげる者たちが、リベリア国民の大多数の側にはいないという事実だ。彼らには彼らだけの戦略があるということだ。テイラーが一連の会議に送り込んだNPFL代表の顔ぶれを見てもらえばよい。そこには一人として国民の代表者、とくに今次の戦争で実際の戦闘に従事してきた民族集団の代表者がいないのである。たとえば、テイラーが近ごろ送り出したNPFL代表団、というより、わたしがNPFLを離脱する以前からそうした代表団には、実際にテイラーを敵から守ってきたニンバ州出身〔＝ギオ族・マノ族出身〕の者が一人もいなかった…テイラーは彼らを利用しているだけであり、彼らもそのことに気づいている…だがそればかりか、テイラーはこの国のアメリカン＝ライベリアン民族集団（Americo-Liberian ethnic group）を代表しているようにも思える。アメリカン＝ライベリアンたちは現に巨額の資金を調達し、それをテイラーに提供し続けているのである…」

（まじま・いちろう／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）